

# 南部つ子

第7号

平成17年9月30日

寒河江市立南部小

## 創立一二二周年記念式典

### 九月の俳句

#### 一年

あぎのよる 虫のこえて おんがつかい 二ぬま ゆつ  
あかたんぼ ゆうやけぞらに とんでいく いがらし なつき  
おつぎまのま じゅうごのよる かくれんぼ さごう あや  
たいふうで たつまをたらと とばされそう すずき くり  
かまきりは くもむらにいて かくれんぼ あらぎ みらい  
あぎあかね わたしとおなじ なまんだね いがらし あかね  
あかたんぼ わたしとぎようそう よーいどん まつたじゆんな  
カマキリが たまごをうんで いつかえる よしみ たける

#### 二年

こおろぎで つるりせいでいも ほつてみる 佐藤 実来  
すずむしの なぎこえひびく ぼくのいえ 古城 智治  
あぎのよる いろんな虫が 音楽会 柏倉 彩加  
ひがんの日 おだんこねらつて よういどん 須藤 円香  
何の音 きれいな音は こおろぎだ 今井 雄平  
赤とんぼ タやけ空で おいこっこ 安孫子 優羅  
あぎの水 つめたくなつて おいしいな 鈴木 里歩  
コスモスが 風でゆらゆら おどつてる 高梨 凌

#### 三年

すずむしの なき声聞いて ねむれるよ 佐藤 匠  
お月見だ くもさんちよつと どいてくれ 高橋 尚寛  
夕やけに カラスどいつしよに 帰ろうよ 黒田 七海  
キリギリス うらのたんぼで こんにはは 木村 亮雄  
カマキリが あちこち草むら あたま出せ 工藤 尚路  
秋の朝 さむくて目がさめ ふとんくれ 鈴木 久留美  
おまつりの 笛やたいこが 聞こえたよ 佐藤 日菜  
秋の夜 家族そろつて くりごはん 逸見 大成

#### 四年

はれた空 コスモスたちが せいくらべ 野尻 理歩  
秋なれば 食よくわいて きましたよ 佐藤 菜那  
やきいもを 食べたあとでも タごはん 出羽 道華  
コオロギが 夜はお外で コンサート 阿部 円香  
コオロギと いつしよにお外で 笛を吹く 出羽 道華  
コオロギの すずしい声に ひたる夜 庄司 碧  
ぼうの先 はねがひらひら とんぼいる 鈴木 樹絵里  
連休に 父どいつしよに いわし雲 丹野 あずさ  
カマキリが どこから来たのか ぼくのかた 黒田 健嗣  
ぼくんちの どうもろこしが 一番だ 五十嵐 陽一

#### 五年

見上げれば 朱色に染まる 秋の月 鈴木 智帆  
えさをとり まんぞくそうな カマキリだ 大泉 孝文  
秋風に 実る稲穂に 赤とんぼ 武田 昌太  
一面の 稲穂と競う 赤とんぼ 出羽 道華  
見上げれば いつもトンボが おいかけて 原田 文  
グラウンドは バッタが集まる ひみつ基地 佐藤 佑衣子  
サンマ焼く 煙にさそわれ ねこが来る 阿部 美空  
秋祭り 南部太鼓が なりひびく 沖津 佳菜美  
夏終わり 松虫コオロギ 演奏会 奈良崎 晃隆  
庭に出て 秋の七草 さがしだす 須藤 史帆  
キキョウ見て 心がなごむ お母さん 逸見 千裕  
キキョウ見て 静かに笑う お母さん 出羽 道華  
帰り道 空を見上げて いわし雲 佐藤 有華  
夕ぐれに 私とたんぼの 運動会 大沼 希  
カマキリに ゆびをつかまれ とれないよ 佐藤 佳祐

#### 六年

芋煮会 コスモスの花 おどなりに 若松 和  
耳すまし 聞けば安らぐ 秋の虫 大築 郷  
秋の夜 三日目見ようと 外に出る 鈴木 美紅  
鈴虫が きれいな声で 大合唱 今野 恵理  
さわやかな 秋暗れのもと ボール蹴る 布施 拓哉  
秋の日に ブドウを食べてひと休み 佐藤 美波  
キリギリス 草むらの中で チリチリリン 田宮 欣樹  
コオロギが 鳴き出す夜の すずしい日 大沼 春子  
いつはいの ススキに止まった トンボ達 荒木 菜未乃  
煙立つ 河原で楽しい 芋煮会 工藤 なるみ

## 家族・大人の部

S.Lに 寒河江まつり 胸はずむ	佐藤愛結母
S.Lが 来るたびすすき 踊つてる	渡辺真由祖母
新人戦 親が一番 緊張し	佐藤佑衣子母
せせらぎに 羽を休める 秋の蝶	阿部美空母
叱られし 児の指に止まれ 鬼やんま	阿部美空母
秋晴れに S.Lの旅 楽しそう	沖津佳菜業姉
堤防に ぴんと立ってる 曼珠沙華	奈良崎昇隆父
もてなしは おいしい空気で 芋煮会	奈良崎昇隆母
実り待つ 広野に響け 応援歌	夢野継木
運動会 子どもの応援に 励まされ	夢野継木
五大堂 磯の香淡し 岩あわれ	夢野継木
<b>修学旅行秀作</b> (六年 九月一八)二九日松島夕画	
五大堂 夕日は沈むが 思い出消えぬ	大築 郷
いい話 母と姉とに 自慢しよう	五十嵐 麻未
科学館 苦手の理科が 盛りだくさん	佐藤 拓也
バスの中 のこったカメラで 笑顔どり	大谷 梨沙
楽しみも あっという間の 二日間	阿部 正伸

## 伝え合いは学び合い

研究主任

小北 茂子

南部小学校が伝え合いを研究の重点にしたのは、今から、四年前です。振り返ってみると、「伝え合ひ」という言葉の意味合いが年々、厚みを増してきたように思えます。最近あつた研究会の話し合いでも、貴重な発言がありました。

「手を挙げて発言するぐらいのこと、限界を感じてきました。」

「楽に発言できるような試みをしていきます。」

つまり、先生方は、学習する子どもたちをよく見、口頃、あたりまえのように子どもたちになんて話しているか「挙手」にも着目し、「伝え合ひ」を豊かなものにしようとしているのです。それは、自分が思ったことを考えたことを出し合い、聴き合うこと。そのことが、学習そのものなだという考えから生まれたものだと思えます。私たち教師も、研究会の話し合いや口頃の対話から、学び合っているといつていいでしょう。

子どもたちは、すばらしいです。われわれの考えをはるかに超えることをやっていることがあります。先日の授業研究会においても、

「あのいうことが言えるとは思いませんでした。」

と授業者は、子どもの姿に驚いていました。このように、子どもが大人や教師を超えたときを、本当の「子ども主体の学習」というのだからなあというれしくなりました。自分の考えをみんなの前で述べることは、大人でも大変です。自分ができる人、子どもはできない人と考えてはいけなように思います。子どもとともて教師である自分も、常に、伝え合うための努力をし続ける一人の人として、師弟同行の精神で、学ぶ毎日でありたいと思います。子どもたちの質の高い発言に出会うと、私は、いつも言います。

「ああ、今日も、学校に来てよかった。」